

べにづーへびく

面赤くして帯あり。〔紅面〕。
べにづけゆび〔紅附指〕(名) べにさしゆび無
べにばな〔紅花〕(名) 〔種〕菊科に属する草、莖葉
共に刺ありて鋭(ア)に似、夏の頃紅黄色の花開く、
花よりは紅を種子よりは油を採取し、嫩葉は食用に
供せらる。クレンのあひ、クレンなる(紅藍花、呉藍)
べにひわ〔紅鶴〕(名) 〔動〕燕雀類中すめ科に属
する鳥形ひわより小さくして、頭部深紅色なり。
べにます〔紅鱒〕(名) 肉色の深紅なる鱒。
べにりんご〔紅林檎〕(名) 〔種〕林檎の一種、船
来の種なり、果實は紅色にして我國在来のものより
大形なり。あかりんご、カラなし、ない
べにネーり〔紅
繪賣〕(名) 享保
の頃、一枚摺の繪
を賣りあるきしもの。
家の人、やぬし。
家の主人、やぬし。
のこ(名) 陰囊中の核、即ち睾丸の稱。
へばりつくくけけ(自、か四) ねばりつく、つき
へび〔蛇〕(名) 〔動〕ヘビの轉言、蛇類に属する爬
蟲の稱。ながむし、くちなは、反魚。
へびいちご〔蛇苺〕(名) 〔種〕蓋被科に属する草、
山野に自生す、葉は三個の小葉より成る、花は黄色
にして、果は赤實色なり食ふ、からず、くちなは
いちご(麻、地毒、地蕪)
へびがみ〔蛇神〕(名) 蛇の靈。
へびがみつ
き(の略言) 一 つき〔蛇神附〕(名) 蛇の靈に
とりつかれたりといふ一種の精神病にかゝれる人。
へびくち〔蛇口〕(名) 細毛などの端を縫ひねて



りうふにべ

へびたへま

環にせるもの。
へびたけ〔蛇茸〕(名) 〔種〕菌類の一、形初年似似、
菌傘の下面に皺皺なし、有毒なり。(紅蕪)
へびたま〔蛇玉〕(名) 〔種〕菌類の一、形松露に似
て毒あり。
へびつかひ〔蛇道〕(名) 蛇をさまじく、に弄び
て、見物人に錢を乞ふもの。
へびざ〔戸人〕(名) 家内の者、家族。
へびひり〔放屁〕(名) 屁をひると、又、其人。
へびむし〔氣蟲〕(名) 〔動〕鞘翅類に属する
昆蟲、長さ八分許、全身黄色にして翅に二個の黒色
なる斑紋あり、危害に接するときは、黄色の臭氣あ
る五筋を發す。へびむし(行夜、氣蟻)
へびじん〔Pepin〕(名) 〔化〕胃液中にある酵素。
へびふた〔戸札〕(名) 戸籍、人別帳。
へびとん〔Pepone〕(名) 〔化〕蛋白質の一種、水
に溶しけ易く熱によりて凝結せず、又、動物質の膜
をよく通過し得、食物中の蛋白質は胃液中のペプ
シン及胃液中のトリプシンに遇ふときは、ペプト
ンに變ず。
へびふみた〔戸札〕(名) へびふたに同じ。
へび衣服(名) きもの(小兒の語)。
へび(名) へびのこに同じ。
へびの子(ころし) 中國及九州地方の方言。
へびのれけ(名) へびれけに同じ。
へびのやか(名) 空しく時日を経過するさま。
へべれけ(名) 空しく酒に酔ふと。
へば(名) つたなきと、下手、一將棋、よくな
きもの、好ましからぬもの。
へば(名) 氣のきかぬと、まぬけ、物事のくひ



15へ

へまはへらさ

ちがふと、問のわるきと。
へまは〔鱒〕(名) 鷹の鱒、を巻く具。
へまさる(自、か四) 時日を経て次
第にまさり行く。
へみ〔蛇〕(名) へびの原語。
へみ〔樞〕(名) 〔種〕忍冬科に属する木、樹皮は紫赤
色にして皺あり、葉は楕圓形にして地味は花冠より
長し、赤色の果實を結ぶ、觀賞用として栽培せられ、
又、木材は種々の用に供せらる。ごねづ、やまてま
り、へまのき、のき〔樞木〕(名) 〔種〕前條
に同じ。
へめぐる(自、か四) 旅行し
て諸處をめぐる。處々をめぐりある。遊歴、遊歴。
へや〔部屋〕(名) 一家の中に區別してある座敷。
ま、さき、つばね、室。徳川時代に諸大名の江
戸屋敷に、其屋敷のこもの又は人足などの詰め居た
る所。がしら〔部屋頭〕(名) 徳川時代に、
諸大名の屋敷のこもの人足などの親方。
へみ〔部屋住〕(名) 掃子のいまだ家督を相繼せざ
る間の身分、又、二三男にして家督を相繼し得ざる
身分。
へもち〔部屋持〕(名) 姻枝の自己専
用の部屋を有するもの。
へら〔餅〕(名) からすきの耳、すか。
へら〔笹〕(名) 竹木象牙又は金屬にて編
長く平たくつくりたるもの。
へら〔遍羅〕(名) 〔動〕硬骨類中かんだひ
科に属する魚、體は側扁にして楕圓狀を
なす、鱗の滑かにして光彩あり。
へら(名) へらなるもの。
へらさき〔笹鷲〕(名) 〔動〕硬骨類に属する鳥形

へらさきつへりさ

蟹に似て、羽毛は暗灰色を帯び、嘴は平たくして高
の如し。
へらさきつ(名) 〔種〕鴨の稱。
へらすす(他、さ四) 少なくす、へす、はぶ
へらすくち〔不滅口〕(名) まけをしみのこと
ば、又、役に立たぬことば。をたたくへら
ずぐちをいふ。
へらすもの〔不滅物〕(名) 役に立たぬもの。
へらすなり(助動) 可き様なり。の如し、はてはも
のうくなりぬ。
へらへら(名) 副 ①よどみなくまやべり立つる
さまにいふ語。②うすく弱きさまにいふ語。
へらへら(名) 副 ①前條に同じ。②西洋の語を
讀み又はまやべるさまにいふ語。
へらばら〔笹杖〕(名) かるかばか、たはけ、
めえ〔笹杖奴〕(感) のしり又はまげすみなど
するときにいふ感動詞。
へらんめえ(感) へらばらめえに同じ。(東京の
へり〔縁〕(名) ①ふち、はし、邊。②藤の兩邊を包
む布、品障。③かはり。〔縁革〕(名) 物の
へりをとる革。
へりオスタット〔Hilostat〕(名) 〔理〕太陽の光
線を室内適宜の方向に送る平面鏡。
へりくた(自、か四) 他をうやまひて自
身を下に置く、自らつゝしみて敬意をつくす、みづ
から卑下す。
へりくつ〔屁理窟〕(名) 役に立たぬ理窟、理に
あはぬ議論、こりくつ。や〔屁理窟家〕(名)
よく屁理窟をいふ人。
へりどり〔縁取〕(名) へりとると、又、へりとり
たるもの、ふちとり。

へりせへらさ

へりせ(自、か四) ふちをつく。
へりぬり〔縁塗〕(名) へりを塗ると、又、へりを
塗りたるもの。
へりりウム〔Beryllium〕(名) 〔化〕延性を有し銀
白色の光澤を有する稀有の金屬。
へる(自、か四) へりくた。る、める。
へる(自、か四) 減(自、か四) 少なくなる、とほしくな
る。へる、へる、へる。
へる(他、さ四) 減(他、さ四) 減らす、減らさ
る。へる、へる、へる。
へる(名) 減(名) 減らす、減らさる。
ベル〔Bell〕(名) 電鈴、自轉車等につくる鈴の類。
ベルチエーかりくわ(自、か四) 効果。Bellian-
effect(名) 〔理〕二つの異種の金屬を接合して電
流を通ずるときは、電流の方向により、其接合部の
或は熱せられ或は冷却すると、例へば蒼鉛とアン
チモンとを接合して、電流を蒼鉛よりアンチモン
へ通ずるときは、其接合部は冷却し、反対の方向に
通ずるときは其接合部は熱するが如し。
ベルペチュアン(名) 〔オランダ語〕Perpetuum)
昔時オランダ人の賣り物として來りたる一種の布帛。
ベルモット(名) 〔スイス語〕Vernouthの意。
洋酒の一種、味味に似て精々苦味を有す。
ベレンス〔洋音〕(名) 〔スロロンに同じ〕。
ベロ〔舌〕(名) 舌の異稱。
へろへろ(名) 副 弱くして、かりせざるさまに
いふ語。一武士。
へろへろ(名) 副 舌にて物をなむるさまに
いふ語。①いたく酔ひくづれたるさまにいふ語。
へろへろ(名) 副 前條に同じ。②難なく食ひ
盡すさまにいふ語。
へろへろの(かみ)〔舌舌神〕(名) 小兒の遊戯、
事をなせる人の判然せざる時、環坐して、紙捻の尖

へらりへん

を折り曲げ、これを兩手の間に挟みて去ばらくもみ
廻して止め、其さきの差したる方をそれと定むる
へらり(名) 副 舌を出すさまにいふ語。
へらり(名) 副 前條に同じ。
へらり(名) 副 前條に同じ。
ペロリン(名) 〔イギリス語〕Berlin blueの訛。
ドイツ國柏林産の藍の藍、紺色の顔料、スズ
ペロんと(名) 顔を洗ふと、小兒の語。
へら(名) へらなるもの。
へら(名) へらなるもの。
へん(名) へんにさかひ、さかひ。かたあな
か、かたはと。へん、あた。かざり、はて、
きし、はと。①(歌)幾何學にて、多角形を圍め
る直線の限界たる部分の稱、代數學にて、等式の等
號の左右にある式又は數の稱、其右にあるを右邊と
いひ左にあるを左邊といふ。
へん(名) へん、かたあち。かたつち、か
たはう。かたはと。かたあな。かたわれ。
①漢字の左方のもの、即ち坂梅などの土木の字
をいふ。
へん(名) ①首尾全く揃ひたる詞文。②一編
になりたる書物。③書物の一部分。初。
へん(返) (名) たび、ど、回、返。
へん(變) (名) 不時の出來事、情事。①わざは
ひ、さいなん。②みだれ、さうどう。③ふま、希有
た。④いぶかしきと、うたがはしきと、一と思つ
た。⑤うつかりかはり、轉化、四時の一。⑥はかり
ごと、權略。⑦すべて物事の通常にてあらざることに
いふ語。一人。
へん(辨) (名) ①わかち、差別。②とりあつかひ、處
置。③わかち、區別。④古昔、太政官の官名、

べんーべんこ

左右各大中少あり、八省を分督し官中の職務を執りしもの、おはともひ、辨官、(べん) (名) ことばづかひ、くちまへ、「能一」...

べんちーべんか

(べん)ちん「片雲」(名) 断片のくも、(べん)ちん「邊要」(名) 國境の要害、(べん)ちん「變易」(名) かはると、又、かふると...

べんかーべんく

(べん)かん「片簡」(名) ちよつとしたかきもの、(べん)かん「返簡」(名) 返事のてがし、(べん)き「騙欺」(名) かりあざむくと...

へんくーべんけ

(へん)くわ「變化」(名) 一の狀態より他の狀態に轉ずると、一の性質より他の性質に轉ずると、かはると、(文法)動詞、形容詞及助動詞の語尾が形を變ずると、はたらき、活用、(へん)くわ「偏光」(名) なたよりの光、(かたよりの條を見よ)...

べんけーべんこ

ざりつ「辨慶草」(名) 「植」(い) 景天科に屬する草、高さ二三尺許、葉は圓くして叢生す、葉は無柄にして鋸齒を有し莖生す、花は五瓣にして通常淡紅色又は紫色を呈し秋の頃開く、いきくさ、ちどめぐさ、(景天)る「ナザさい」の一名、(辨慶)「辨慶」(名) 石龜の模様を遺漢體にせる篇、(べん)けつ「便血」(名) 大小便に血のまじりて出づると、(へん)けふ「偏狹」(名) せまきと、ちひまきと、(性急にして度量なきと、寛容ならざるをさると、(へん)けん「偏見」(名) 中正にはげれたる見解、(へん)けん「邊見」(名) 「佛」斷常の二邊を執して、中道を見ざるを、(へん)げん「偏言」(名) 正しからざる言、(へん)げん「片言」(名) なたこと、(へん)げん「變現」(名) 狀態を變じてあらはる、(へん)げん「變幻」(名) 忽ちあらはれ忽ち消ゆるを、狀態の變化のすみやかなると、(べん)けん「便娟」(名) 志トヤカ、みやびやか、(へん)こ「偏固」(名) なたくな、へんくつ、(へん)こ「變故」(名) 平常にあらざる事柄、又、さまじくの事柄、(へん)こ「片語」(名) なたこと、ちよつとしたること、(べん)こ「辯護」(名) 其人のたりにいひひらきして助勢すると、其人の利益となるを主張してたすくると、(べん)こ「辯口」(名) ものを言ふと、志やべるを、辯舌、(べん)こ「便口」(名) すらくとよくものをいへんこく「偏國」(名) 首都に遠き國、

べんこーべんさ

(べん)ごさ「辯護士」(名) 訴訟當事者の委任又は通常裁判所の命令により、通常裁判所に於て法律に規定せる業務を行ふもの、(こ)かい「辯護士會」(名) 各地方裁判所に組織せらる、其附屬辯護士の團體、該地方裁判所檢察正の監督を受け其業務上に於ける規律を維持し兼て共同の利益を全うするを目的とするもの、辯護士はこれに加入するにあらざれば開業するを能はず、(べん)ごにん「辯護人」(名) 辯護士の俗稱、又刑事被告人の辯護をなすもの、總稱、(へん)さ「偏佐」(名) 一部分の職務のすけ、(へん)さい「邊塞」(名) とはきくにさかひ、(へん)さい「變災」(名) わざはひ、さいなん、(へん)さい「返濟」(名) かりたるものをかへすと、(へん)さい「遍在」(名) あまねく存在すると、(へん)さい「邊材」(名) 「植」樹幹の所に生じたる年輪の白色を帯びて柔軟なる部分、また、(べん)さい「辨濟」(名) 「法」債務の履行、(べん)さい「辯才」(名) 辯舌のはたらき、くちまへの才能、(べん)さいてん「辨財天」(名) 「佛」吉祥天女の稱、我國にては七福神の一として記る、(べん)さいるる「辨鯽類」(名) (動) 軟體動物の一、雙殼類に同じ、其體と體を包む二枚の外殻膜との内に二つの觸腕をなす觸あり、(へん)ささ「洋筆先」(名) 「ペン」の端末、洋筆軸に挿して用ふ、よびさき、「一」で誤魔化したる金、(べん)さく「鞭策」(名) ち、ち、ち、(べん)さつ「返札」(名) 返事の手紙、

ほぞほーほなか

しにて、すんでのこに、もはかた、ほとんど、(獲)。
ほぞほぞ(名) 副。戸を叩く音のさまに、いふ
語、(刺、) 響にて、(獲)る音のさまに、いふ語、(丁)

ほながーほねち

ちて、とひし君は、や、
ほなが(穂長) (名) 穂の長に同じ。
ほねみ(穂波) (名) 穂の波に同じ。
ほねみ(穂波) (名) 穂の波に同じ。
ほねみ(穂波) (名) 穂の波に同じ。

ほねつぎーほばら

ほねつぎ(骨繼) (名) 骨の折れ又は關節の外に
れたる骨を、又其人(骨繼)
ほねなし(骨無) (名) 骨のなれたる不具者、
ほねぬき(骨抜) (名) 骨を料理して其骨を去り
たるもの、(一) 骨。

ほばくーほふあ

と、(罪人のめしとり、又、其役、一) 捕亡
吏(名) 罪人めしとりの役人、
ほばく(捕縛) (名) とらへまはると、
ほばしら(帆柱) (名) 帆をあぐる爲に船に樹け
る柱、(一) 帆。

ほふあーほふわ

ち本有の法性にして、佛の出世若しくは出世なきと
を問はず、常に平等にして變易なきもの、(一) プ
ツ(法身佛) (名) 佛常住不變なる法身の佛、
ほふあ(法身) (名) 佛親王(名) 得道したま
ひたる親王を申す語、
ほふたい(法體) (名) 佛の體、(一) ほふあ、(一)
(法性)に同じ、(一) ほふたいに同じ、

ほふわーほほけ

上天皇を申し奉る語、
ほふわり(法王) (名) 孝謙天皇の時、僧道
鏡に授けられたる位、月科は供御に准せられたり、
(一) カトリックの總首領の位、カトリックの
教祖を代表し「イタリア」國「ローマ」に居り、其下に
内閣ありて、法王の地位となる時は内閣これを
選舉す、(一) パパ、(一) ポープ、
ほへ(法會) (名) 佛の法を説くために
衆を會すと、(一) 死者の追福を營むと、
ほへ(步兵) (名) 徒歩にて戰闘に従事する兵
種、又、其兵種に屬する軍人、
ほへ(幕表) (名) はかざるし、(幕表)
ボヘミアガラス [Bohemian glass] (名) 「カリ
ガラス」に同じ、
ほほ(頬) (名) 顔面の一部、目の下にして鼻口の傍
なる所、つち、
ほほ(朴) (名) 木蘭科に屬する木、多く深山
に生ず、葉柏に似て鋸齒なし、夏の頃白木蓮に似た
る香氣多き花開く、樹皮は染料に木材は種々の用に
供せらる、ほ、のき、(商州厚朴)
ほほ(歩歩) (副) 一足づつ、又、あゆみながら、
ほほ(保母) (名) 「はうぼ」に同じ、
ほほ(略粗) (副) あら／＼、あらかた、おほかた、大
ほほ(頻當) (名) めんぼほ、
ほほ(放寮) (他、き四) はかす、
ほほ(頻被) (名) 頭より短へかけて手
拭などを被ると、
ほほ(頻返) (名) 頻りに返るもの
を指し、(一) 都合をつくと、
ほほ(頻返) (名) は、ばね、

ほんぼーほんみ

る伴給の類。
ほんぼちこめ(名) 粘氣なくなりたるひね米。
ほんぼり(名) 一種の料理、鴨、鰯、海老等の肉を湯煎にしてはぐし、更に固めて煮汁をかけたもの。

ほんむーほんり

(元命) 一、本やりの「本命星」(名) 「佛」北斗七星に金輪星、妙見星を加へての稱。
「ほんむ」(名) 本務(名) おもなるつとめ、主たるつと。

ほんりーま

流儀。
ほんりやち(名) 「本領」(名) 本来の領地もとの知行所、本知。
「ほんり」(名) 凡庸(名) 凡人のかんがへ。

ま

ほんぼーほんみ

前事に時客を興ふる神。
ま(馬)(名) 「うま」の約音、「一屋」。
ま(目)(名) 「め」の轉、「一」のあたり。

ほんむーほんり

「まいび」(眉毛)(名) 「まげ」の訛。
「まいびつ」(毎月)(名) つきごと、つきん、一、赤緯變化により、黄道に對する地球の極の運行を變化すると、其週期は半個月なり。

ほんりーま

「まいふく」(埋伏)(名) かくれひそむと、又かくしひそますと。
「まいぼつ」(埋没)(名) 埋めてかくる、と。

まろはーまろさ

(まろ・さん) 猛禽(名) 猛禽類に属する鳥。たけき鳥。一、猛禽類(名) (動) 鳥類の一、體強剛にして嘴爪共に鋭く上嘴曲がる。強大なる羽翼を有し飛翔迅速なり。性猛烈にして春稚動物を捕食す。通常僅少の卵を産む。羽毛は雌雄及齢と成鳥とによりて異なり、たか・ふくろふ等これに属す。

まろあーまろあ

(まろ・あ) 猛士(名) をのこ。つよきまらひ。まろしあ(名) (動) 申上(他、か下二) 上へ申し出づ。

まろあーまろち

(まろ・あ) 猛将(名) たけき大將。まろあや(名) (動) 網状脈(名) (植) 葉脈の主脈と支脈との間にありて許多の網状をなせる細脈。

まろちーまろい

(まろ・ち) 官腸(名) (生) 大腸の條を見よ。まろ・づ 諸(自、た下二) (まろいづ) 音便。来るに至るの敬語。出で。参上す。参詣す。まゐる。

まがかーまがね

まががき(名) (名) 凶き神。まががき(名) (名) 粗く編みたる垣。まががき(名) (名) 遊郭にて、店と入口の落間との間の格子戸。

まがひーまがり

まがひ(名) (名) まがふと。あやまち。まがひ(名) (名) 粉(名) (名) まがふと。あやまち。まがひ(名) (名) 粉(名) (名) まがふと。あやまち。

まがりーまさぞ

まがり、みち(曲路)(名)折れ曲がれる路。
まがり、もち(勾餅)(名)米麥の粉を餡に和し、

まさぞーまさる

まさぞへ(巻添)(名)他人の罪に關係して罪
にちかひあると、かたりあひひきあひ、連累、

まさわーまく

まさわら(巻葉)(名)巻き束ねたる葉草、射術を
習ふに用ふるもの。
まさわり(新割)(名)新を割るに用ふる刃物(剪



(一)くま

まくーまぐち

まく、向く、夕方まで。
まく、く(む)け(む)る(任)(他、か下二)「まからすの
約」地方官に赴任せさせ、大君のまのまに、

まくはーまくは

まくは(馬鞍)(名)馬鞍(名)水田をな
らす具、上に柄あり下に齒あり、



(はぐま)

まくばーまくら

まくば(幕張)(名)幕を張りたる處。
まくばり(間配)(名)まくばると。
まくばら(間配)(名)まくばると。

まじもーまろん

がほ(真面目顔) (名) 前條(一)に同じ。
くさ(真面目臭) (他) (四)
まじもの(糞物) (名) 臭厄の人にかゝるやうに...

ますーますか

ます(鱒) (名) (動) 鱒類の中きけ科に
屬する魚、形さげに似、背は透藍色に
して側線は銀白色を呈す、體長大な...



[すま]

ますがーまぜく

つらぬきたるもの。
ますがた(枳形) (名) とがたに同じ。
如き形、城郭の狭くして方形をなしたる所、むろ...

まぜこーまたき

まぜ(せ) (名) 入れまじ(たる)と。
まぜ(ば) (座) (助動) 助動詞「まし」の變化にして
「ましかば」と相對するものなるべし、多く過去の推...

またきーまたた

またき(風) (名) 副) 未だ其時期に達せざる時、は
やきとき、わが名は一立ちにけり。
またき(復) (名) 聞きたる人より聞く。
またき(風) (副) 未だ其の時に至らぬ先に、...

またたーまたら

たぐ時間、急速の時間、一うち(瞬中) (名)
前條に同じ。
またた(のみ) (又) (名) 仲人に人を立て頼む。
またた(木天蓼) (名) (種) 狸類科に屬する...

まつちーまつば

鹽素酸「カリウム・硫化」アンチモン及硫黄等の混合物を膠汁によりて木片の一端に附着せしめ、これを入れおろす赤燐・過酸化マンガン・硫化アンチモン等の混合物を塗布したる側面に摩擦して螢火せしめるもの。

まつばーまつよ

まつばらん「松葉蘭」(名) 一種松葉蘭科に属する草、葉細長くして少数細微の葉生ず、花は黄色にして茎頭に開き、觀賞用として栽培せらる。

まつらーまつて

まつらふ「まつらふ」(名) 服、順(自、は四) 志たがひつく、よく衣ゆるす。

まつてーまつたの

如し、肉は順に似て細長し(竹筒、馬鈴)。
++まつて「語」(動) まうづの變化なる(まうて)の時

まつたーまつたの

まつたは「的場」(名) 的を設け弓術を習ふ所、(一)まつたは「す」(名) 一種の料理、茄子を細く切り、油を加へて焼く(二)まつたは「まつた」(名) 松の木の分たせる液、粘氣が多きもの種々の用に供せらる。



まつたーまつたの

まつたは「真魚」(名) (まは美稱) 魚の稱、(一)まつたは「真魚板」(名) 魚肉を料理するに用ふる板、(二)まつたは「真魚」(名) 魚肉を料理するに用ふる板、(三)まつたは「真魚」(名) 魚肉を料理するに用ふる板。

まめーまめめ

はたらくと、動転なると、真心をつくすと、かげひな たなきと、宿質、③身性の健全なると、すこやか、 ④いろごの少、 「す語、一人形」。

まめぬーまもら

まめぬつさう「豆納豆」(名) 舊名納豆に對し て、普通の納豆の稱。



[うめんはめま]

まめをーまやか

まめををど「實男」(名) ①まめなる男、まじめな ぶ男、まことある男、實意のある男、 ②好色なる男、 「さき體の男、

まやくーまよは

まやく「麻薬」(名) 毒が自ら吐出したる纖維性の絲狀 物をもつてつくり、中に甌りて時期を経過する果、 楕圓形にして普通少しくびれを有す、色は黄又は

まよはーまらり

まよは「迷」(他、さ四) まよふやう にす。まどはす。

まりーまるが

まり「謎」(名) 圓状をなす玩具用の球、革製、陶製 又は銅を心とし絲をまといたるもの等あり、(鞠)



[んてシリマ]

みかへーみさの

の表紙のうらがへしたる所。
みかへーみさの(見返)他、(さ四)後の方へ向ひ見る。
みかへーみさの(見返)他、(さ四)後の方へ向ひ見る。
みかへーみさの(見返)他、(さ四)後の方へ向ひ見る。

みきはーみくに

みきはーみくに(江)名(水原の善土地と水との接したる所。水原、水産、池、沼)。
みきはーみくに(見極)他、(ま下二)見届く。
みきはーみくに(見極)他、(ま下二)見届く。

みくびーみけつ

みくびーみけつ(御膳)名(御膳の神宮に依り)。
みくびーみけつ(御膳)名(御膳の神宮に依り)。
みくびーみけつ(御膳)名(御膳の神宮に依り)。



[りくみ]

みけつーみい

みけつーみい(御食)名(御食の神宮に依り)。
みけつーみい(御食)名(御食の神宮に依り)。
みけつーみい(御食)名(御食の神宮に依り)。

みこぞーみさか

みこぞーみさか(御言宣)名(御言宣の神宮に依り)。
みこぞーみさか(御言宣)名(御言宣の神宮に依り)。
みこぞーみさか(御言宣)名(御言宣の神宮に依り)。

みささーみじか

みささーみじか(御膳)名(御膳の神宮に依り)。
みささーみじか(御膳)名(御膳の神宮に依り)。
みささーみじか(御膳)名(御膳の神宮に依り)。

みじか—みぢや

みじか(短)形(一)たけぞしながさ
みじか(短)形(二)たけぞしながさ
みじか(短)形(三)たけぞしながさ
みじか(短)形(四)たけぞしながさ
みじか(短)形(五)たけぞしながさ
みじか(短)形(六)たけぞしながさ
みじか(短)形(七)たけぞしながさ
みじか(短)形(八)たけぞしながさ
みじか(短)形(九)たけぞしながさ
みじか(短)形(十)たけぞしながさ

みぢや—みぢや

みぢや(短)形(一)たけぞしながさ
みぢや(短)形(二)たけぞしながさ
みぢや(短)形(三)たけぞしながさ
みぢや(短)形(四)たけぞしながさ
みぢや(短)形(五)たけぞしながさ
みぢや(短)形(六)たけぞしながさ
みぢや(短)形(七)たけぞしながさ
みぢや(短)形(八)たけぞしながさ
みぢや(短)形(九)たけぞしながさ
みぢや(短)形(十)たけぞしながさ

みすち—みすち

みすち(御膳内)名(一)垂れ下げたるみすの
みすち(御膳内)名(二)垂れ下げたるみすの
みすち(御膳内)名(三)垂れ下げたるみすの
みすち(御膳内)名(四)垂れ下げたるみすの
みすち(御膳内)名(五)垂れ下げたるみすの
みすち(御膳内)名(六)垂れ下げたるみすの
みすち(御膳内)名(七)垂れ下げたるみすの
みすち(御膳内)名(八)垂れ下げたるみすの
みすち(御膳内)名(九)垂れ下げたるみすの
みすち(御膳内)名(十)垂れ下げたるみすの

みすち—みせも

みすち(御膳内)名(一)垂れ下げたるみすの
みせも(見世物)名(一)珍らしき物又は演藝な
みせも(見世物)名(二)珍らしき物又は演藝な
みせも(見世物)名(三)珍らしき物又は演藝な
みせも(見世物)名(四)珍らしき物又は演藝な
みせも(見世物)名(五)珍らしき物又は演藝な
みせも(見世物)名(六)珍らしき物又は演藝な
みせも(見世物)名(七)珍らしき物又は演藝な
みせも(見世物)名(八)珍らしき物又は演藝な
みせも(見世物)名(九)珍らしき物又は演藝な
みせも(見世物)名(十)珍らしき物又は演藝な



みせん—みそか

みせん(未然)名(一)いまだ然らざる
みせん(未然)名(二)いまだ然らざる
みせん(未然)名(三)いまだ然らざる
みせん(未然)名(四)いまだ然らざる
みせん(未然)名(五)いまだ然らざる
みせん(未然)名(六)いまだ然らざる
みせん(未然)名(七)いまだ然らざる
みせん(未然)名(八)いまだ然らざる
みせん(未然)名(九)いまだ然らざる
みせん(未然)名(十)いまだ然らざる

みそが—みそづ

みそが(御膳内)名(一)垂れ下げたるみすの
みそづ(御膳内)名(一)垂れ下げたるみすの
みそづ(御膳内)名(二)垂れ下げたるみすの
みそづ(御膳内)名(三)垂れ下げたるみすの
みそづ(御膳内)名(四)垂れ下げたるみすの
みそづ(御膳内)名(五)垂れ下げたるみすの
みそづ(御膳内)名(六)垂れ下げたるみすの
みそづ(御膳内)名(七)垂れ下げたるみすの
みそづ(御膳内)名(八)垂れ下げたるみすの
みそづ(御膳内)名(九)垂れ下げたるみすの
みそづ(御膳内)名(十)垂れ下げたるみすの

みはり—みまら

みはり(見張)一名 見張して守ると。みはると。
みはる(三春)一名 睦月(三)如月(四)彌生(五)
即ち舊暦正月二月三月の三月。さんまゆん。

みまか—みま

みまか(見張)一名 見張して守ると。みまはると。
みまはる(三春)一名 睦月(三)如月(四)彌生(五)
即ち舊暦正月二月三月の三月。さんまゆん。

みまあ—みまざ

みまあ(見張)一名 見張して守ると。みまはると。
みまはる(三春)一名 睦月(三)如月(四)彌生(五)
即ち舊暦正月二月三月の三月。さんまゆん。

みみま—みみづ

みみま(見張)一名 見張して守ると。みみはると。
みみはる(三春)一名 睦月(三)如月(四)彌生(五)
即ち舊暦正月二月三月の三月。さんまゆん。

みみさ—みみむ

みみさ(見張)一名 見張して守ると。みみはると。
みみはる(三春)一名 睦月(三)如月(四)彌生(五)
即ち舊暦正月二月三月の三月。さんまゆん。

みみく—みみや

みみく(見張)一名 見張して守ると。みみはると。
みみはる(三春)一名 睦月(三)如月(四)彌生(五)
即ち舊暦正月二月三月の三月。さんまゆん。



【くぐみ】

むきくーむきみ

物に就きて研究する化学。
(むきくわがふぶつ)「無機化合物」(名)
(むきくわがふぶつ)「無機化合物」(名)
(むきくわがふぶつ)「無機化合物」(名)

むきむきーむきわ

むきむき「向向」(名) 其向(向)により各ことな
(むきむき)「向向」(名)
(むきむき)「向向」(名)

むくーむくび

眞田(名) 夢野にて編みたる眞田、帽子の材料な
(むく)「無垢」(名)
(むく)「無垢」(名)

むくげ「義」(名) 又ははかきげ、にこげ、柔毛、
むくげ「木槿」(名)
むくげ「木槿」(名)

のむく「津門」(名) むくらの生ひ茂れる門、又、
(むく)「津門」(名)
(むく)「津門」(名)

むくわんのたいふい「無官大夫」(名) 古昔、
(むく)「無官」(名)
(むく)「無官」(名)

むくびーむくら

むくび「浮腫」(名) 又はむくび、又、むくびるさま、
むくび「浮腫」(名)
むくび「浮腫」(名)

むくらーむくわ

むくら「木」(名) 又はむくら、又、むくらるさま、
むくら「木」(名)
むくら「木」(名)

むくわーむくびつ

むくわ「向替」(名) 又はむくわ、又、むくわるさま、
むくわ「向替」(名)
むくわ「向替」(名)

むすむーむする

をとめ。①横濱にて、ラシャめんの稱。——「娘氣」(名)をとめのうぶなる心。——「娘義太夫」(名)年若き女の語る義太夫節、又、其語る女。——「ごころ」(名)「娘心」(名)むすむ。②「娘師」(名)十歳やふり。③「自己」の伎倆を振はんと欲し傍觀するに堪へざるさまにいふ語。④「物」を無作法に食ふさまにいふ語。

むするーむせき

の船又は生物の呼吸等によりて生ず、空氣中に存し又は天然水に溶解して存す、石灰水に導くときは白色の濁を生ぜしむ、水によく溶解す、ラムネエビール等は、壓力によりてこれを多量に溶解せるものなり。

むせびーむそち

任をわいて語らず、又は行はざると。むせび(泣)「泣泣」(名)むせび入りつ、泣くと。むせぶ(泣)「泣泣」(名)むせび込み、泣くと。むせぶ(泣)「泣泣」(名)むせび込み、泣くと。むせぶ(泣)「泣泣」(名)むせび込み、泣くと。

むたーむち

「むた」(共)「接尾」名詞の下にある「が」などの助詞の下に添へて「と共に」の義をなし、其名詞を副詞となす語、天地の「窮りなし」(與)。

むちーむづか

「むち」(無知)「名」知識なきこと。「むち」(無智)「名」あらか、あほう。「むち」(無地)「名」全體一色にして模様なきもの。

むつがーむつわ

「むつがたり」(睦語)「名」むつまじく語りあふこと。「むつが」(睦)「名」むつまじく語りあふこと。「むつが」(睦)「名」むつまじく語りあふこと。

むてーむてか

る量、又、其極。
 ①「無手」(名) ②「すて」からて、「徒手」 ③「手段」
 なくして行ふと。
 (むていけい)「無定形」(名) 不定形に同じ。
 (むていけん)「無定見」(名) 一定の見聞なきと。
 (むていぶ)「無丁字」(名) すこしも文字の讀めざ
 ると、あきめくち。
 (むていあるま)「無定位針」(名) (理)極の強さ
 の等しき二つの磁針を平行に且つ其異極を相向
 けて水平に吊りたるもの、二つの異極は互に等しき
 力にて相引合ふを以て、地磁氣の作用を受くること
 なく、磁針は何れの方向にも向ふべし、故に無定位と
 いふ。——でんりうけい「無定位針電流
 計」(名) (理)無定位針を用ひたる電流計、弱き電
 流を計るに用ひらる、二つの磁針の中、下方の磁針
 を圓むコイルあり、
 又、上方の磁針の直
 下に目盛盤あり、初
 め「コイル」の平面を
 磁針と同方向ならし
 め、「コイル」に電流を通ずるときは、
 二つの磁針は異極を以て對し、一は
 「コイル」の内において一は外にあるを以て、「コイ
 ル」に生ずる磁氣作用により、二つの磁針を同方向
 に廻轉せんとし、磁針を吊りたる線を撰(字)じり、
 其抵抗力と約合ふに至りて停止す、よりて上方の磁針
 により目盛盤にて廻轉角を讀み電流の強さを知る。
 (むていたり)「無抵當」(名) 金を貸して抵當物
 をとらざる也。
 (むてか)「無手勝流」(名) 昔時、藤原ト傳
 が琵琶湖上矢走の渡の舟中にて、同舟の武術修行者



むてきーむな

に眞朝仕合を獲(ま)れ、計を以てこれを湖上の小
 洲にあざむきのぼせ、そこにあきすて、其血氣を
 いましめたりといふ故事、轉じて、ト傳流の異稱。
 (むてき)「無敵」(名) 敵するものなきと、相手に立
 つものなきと、「無敵」
 (むてつばふ)「無手法」(名) あとさきみず、む
 (むてん)「無點」(名) 漢文にて、訓點の無きと、(白
 文)——ほん「無點本」(名) 無點の漢籍。
 (むざく)「無徳」(名) 徳望のなきと、宿徳のなき
 と。①見るかひなきと、わびしきと。
 (むざく)「無毒」(名) 毒なきと。
 (むざく)「無得心」(名) 得心せざる也。
 (むざん)「無頓着」(名) 物事に頓着せざ
 ると、平氣なる也。
 (むな)「棟」(名) 「むね」に同じ、「木」。
 (むな)「空虛」(接頭) 他の語に冠して、むなし
 き意を表する語、「むな」に「空」。
 (むな)「胸」(名) 「むね」に同じ、「一見する時」「先」
 (むな)「いた」(胸板) (名) 胸部の平かなる所。①
 鎖の附にあたる所。
 (むながい)「鞅」(名) 「むながき」の音便。
 (むながき)「鞅」(名) 馬の胸より鞍に繋ぐる細
 緒。
 (むな)「かんちやう」(胸勘定) (名) むなざんよ
 (むな)「さ」(名) (胸黄の義)「うなぎ」の古稱。
 (むな)「さ」(棟木) (名) 棟に用ふる材木。
 (むな)「くら」(胸座) (名) 着たる衣服の胸の邊の襟。
 「むな」をつかむ。
 (むな)「むる」(胸苦) (形) 胸も苦
 (むな)「むるま」(空車) (名) 人の乗り居らざる乗
 車。から車。

むなげーむな

むなげ「胸毛」(名) 胸の邊に生ずる毛。
 (むな)「こと」(空言) (名) かりそめの言、あた言。
 (むな)「さき」(胸先) (名) 胸のみづあちの邊、むなも
 と(心下)。
 (むな)「さわき」(胸騒) (名) 心臓の鼓動急にはげし
 くなりて、心氣の震(ぞ)かちなる也(心悸)。
 (むな)「ざん」(胸算用) (名) 心中にてみつもり
 をたつる也(心算)。
 (むな)「し」(空虛) (形) ①中に物無し、内
 容なし、からなり。②あとかたなし、事實なし。③
 無益なり、むだなり。④害積なし、とほし。⑤防禦
 なし、そなへなし。⑥身失す、死ぬ。
 (むな)「で」(空手) (名) からて、素手。
 (むな)「ふた」(棟札) (名) 棟上の時建梁の年月又は
 大工の人名などを記して、棟木に打ち着ぐる木
 (むな)「もと」(胸元) (名) むなざき。
 (むな)「わけ」(胸分) (名) 獸類などが、胸にて草木
 をわけ行く也。
 (むな)「に」(無二) (名) ならびなきと、「一の友」(無比)。
 (むな)「す」(無三) (名) (他) さま むだにす、むな
 しくす。
 (むな)「むざん」(無二無三) (名) (佛)法華經に唯
 有一乘法、無二亦無三とあるに出づ、たゞこれのみ
 にて他にあらざる也、惟「一」の道直し、「一」に
 「無二無三」(副) 傍目も振らず一心直し、一向に。
 (むな)「ん」(無人島) (名) むなんたう。
 (むな)「胸」(名) ①體の前面の首と腹との間。②こ
 ろ、おもひ、心中。③衣服の胸にあたる處、えも
 ん。——あく「心地よくなる」——がやける
 溜飲こころ。——さく「胸の極めて苦しく殆ど
 堪へがたきにいふ」——さわぐ「むなざき」

むねーむのち

—せきあく、悲しくして胸ふさがる。
 つぶる 心かなしみに満つ。++のひまなし 思ひ
 く 心地よくなる。——のひまなし 思ひ
 絶えず。——はしる 氣いらつ。——ひらく
 心地よくなる。——をるし 性質よくなし、又、
 吐氣を備す。——をこがす いたく思ひわづ
 ちふ、こがる。——をひやす おもむき、趣意
 (むね)「旨」(名) ①こ、る、意思。②おもむき、趣意
 (むね)「宗」(名) かなめ、もと、本體、主要。
 (むね)「棟」(名) ①むなざき。②屋根の最も高き處。
 (むね)「刀背」(名) 刀のみな。
 (むね)「棟」(接尾) 家を歌ふるに用ふる語。
 (むね)「あけ」(棟上) (名) 家を建つ時、柱梁の上に
 棟木を上ぐる也、又、其式。
 (むね)「あて」(胸當) (名) 胸部にあつる、あひ、胸
 甲。①布帛にて仕立て、小兒などの胸元のよごれ
 めためにかくるもの。
 (むね)「うち」(刀背打) (名) 刀のむねにて打つ也。
 (むね)「け」(胸氣) (名) 胸のいたむと。「もの」
 (むね)「と」(宗徒) (名) むねと類むともがら、主なる
 (むね)「のひ」(胸火) (名) ももひなやむ心、胸をこが
 すおもひ。「り、主たり」
 (むね)「むね」(し) (宗宗) (形) ①おもだて
 (むね)「わけ」(胸分) (名) 「むなわけ」に同じ。「の」
 (むね)「わる」(胸悪) (名) 心根の悪しきと、又、其も
 (むね)「ん」(無念) (名) ちををしきと、くやしきと。
 「骨髄に徹す」(殘念)。
 (むのち)「無能」(名) 役に立たぬと、才能なきと。
 (むのち)「りよく」(無能力) (名) ①物事をなし得
 る能力なきと。②「法」民法上にては、完全に私權を
 行使し得ざると、又、刑事上にては、行爲の責任を負

むはいーむえ

はざる也。——あや「無能力者」(名) 無能力
 なるもの、民法にては未丁年者禁治産者、禁治
 産者及妻をいひ、刑法上にては身體精神の不十分
 なる發達又は異常等起因したる犯罪者をいふ。
 (むはい)「ゆり」(無尾類) (名) 無尾乳種子(名)
 「種」胚のみありて別に胚乳を存せず、子葉部は著し
 く肥えて内に多分の養料を存する種子、えんどう、
 そらまめ等の種子これに屬す。
 (むはい)「ら」(芙蓉) (名) 「うばら」の古稱。「無類」
 (むはい)「比」(無比) (名) ならびなきと、たぐひなきと。
 (むはい)「くわ」(無被花) (名) 「種」萼及花冠なき不
 完全なる花、例へば梅の花の如きこれなり。
 (むはい)「つ」(無筆) (名) 文字を知らざる也、無學。「と」
 (むはい)「やう」(無病) (名) 病氣なきと、壯健なる
 (むはい)「る」(無尾類) (名) ①動「兩棲類の一目、即
 ち蛙の類、幼時は水中に棲息し尾を有すれども、其
 己に變態を経過したるものは、尾なくして四肢よく
 發達し肺を以て呼吸す。
 (むはい)「ふり」(無風) (名) 氣流のいと靜かなる也。
 風なきと。②地煙の直上するほどの氣流。——
 (むはい)「ふん」(無風帶) (名) 地回無風帶の條を見
 (むはい)「ふん」(無文) (名) 學問を知らぬと。「よ」
 (むはい)「ふん」(無聞) (名) 世の中にきこえぬと、名聲な
 きと。
 (むはい)「べつ」(無分別) (名) ふんべつなきと、か
 んが(なきと)。
 (むはい)「べ」(郁子) (名) 「種」木通科に屬する木、莖は上昂
 す、葉は覆葉にして數個の小葉より成り淡綠色を帯
 ぶ、春末に花梗を抽出き、花莖生す、花の形百合に
 似、白色にして淡紫色を帯ぶ、果實は球形なり、觀賞

むべーむめい

用として栽培せらる、うべ、(野木瓜)。
 (むべ)「宜」(名) げにさもあるべきと、うべ。
 (むべ)「むべ」(宜宜) (形) ①さもある
 べきさまなり、うべくし。
 (むべ)「ん」(無邊) (名) かぎりなきと、はてなきと。
 (むべ)「りう」(無邊流) (名) 槍術の一派、大内無邊
 を祖とす。
 (むべ)「ら」(無謀) (名) 謀計なきと、又、愚慮なきと。
 (むべ)「ふ」(無法) (名) 法なきと、亂暴なる也。
 (むべ)「ん」(無品) (名) 親王の叙位を有し給はぬと。
 (むべ)「ん」(謀叛) (名) 君王又は主君に叛きて兵
 を起すと、そむくと。
 (むべ)「ま」(馬) (名) 「動」うまに同じ。
 (むべ)「まき」(牧) (名) 馬・牛・羊などをはなし飼ひに
 するところ、うまき、まき。「一乾燥」
 (むべ)「み」(無味) (名) あぢなきと、①種なきと、
 (むべ)「やちう」(元明) (名) 「佛」過去の煩惱の惑ひ
 が本性をまほひ、ために邪見妄執をおこして事理に
 闇らざると。——のやみ「元明闇」(名) 前條
 に同じ。
 (むべ)「やちう」(無名異) (名) ①「化」過酸化
 滿他の稱。②吳須之の稱。③炭を燒きたる地下に
 生ずる黑色の塊(藥木炭)。
 (むべ)「き」(朮) (名) 鳥の五臟、も、き、も、け。
 (むべ)「めい」(無銘) (名) 製作物に製作者の銘なきと、
 又、其もの、「一の刀」。
 (むべ)「めい」(無名) (名) 名のわからぬと、又、名を記
 さざる也。——あ「無名氏」(名) 名のわからぬ
 人。——あ「無名指」(名) べにましゆび、くす
 りゆび。——さうへち「無名投票」(名) 無

もぞおーもぞみ

もぞおめ「元締」(名) 勘定などの去めく、りを
もぞす「反吐」(名) 吐き出す。
もぞたち「本立」(名) 草木の根本の生(ひ)た
もぞたね「原種」(名) たね、ふる。
もぞちやう「元帳」(名) 各口座を分けてそれ
もぞづ「くはげ」(名) 木、基(自、か四) もと、しては
もぞつ「ひざ」(名) 昔人の(名) もとのひと。
もぞつめ「本妻」(名) わかひめ、ほんさい。
もぞつめ「舊妻」(名) 昔のつま。
もぞで「元手」(名) 商業を営むために要する基本
もぞどり「髪」(名) 髪を頭上に集めて束ねたる
もぞね「元直」(名) 商品を買ひ入れたるねだん
もぞの「もくあみ」(名) 昔時盲人木阿彌の音聲、
もぞの「もくあみ」(名) 昔時盲人木阿彌の音聲、
もぞの「もくあみ」(名) 昔時盲人木阿彌の音聲、
もぞの「もくあみ」(名) 昔時盲人木阿彌の音聲、
もぞの「もくあみ」(名) 昔時盲人木阿彌の音聲、

もすむーもなか

もすむ「求」(他、主下二) さがす、たづ
もすむ「求」(名) もとむる。
もすむ「求」(名) もとむる。
もすむ「求」(名) もとむる。
もすむ「求」(名) もとむる。
もすむ「求」(名) もとむる。
もすむ「求」(名) もとむる。
もすむ「求」(名) もとむる。
もすむ「求」(名) もとむる。
もすむ「求」(名) もとむる。
もすむ「求」(名) もとむる。

もぬくーものい

もぬく「最中月」(名) 十五夜の月。
もぬく「蛻」(自、か下二) (裳脱)の
もぬけ「蛻」(名) もぬけたるかは、ぬけがら。
もぬけ「蛻」(名) もぬけたるかは、ぬけがら。
もぬけ「蛻」(名) もぬけたるかは、ぬけがら。
もぬけ「蛻」(名) もぬけたるかは、ぬけがら。
もぬけ「蛻」(名) もぬけたるかは、ぬけがら。
もぬけ「蛻」(名) もぬけたるかは、ぬけがら。
もぬけ「蛻」(名) もぬけたるかは、ぬけがら。
もぬけ「蛻」(名) もぬけたるかは、ぬけがら。
もぬけ「蛻」(名) もぬけたるかは、ぬけがら。

ものいーものか

ものい「物言」(名) ものを言ふと、言葉
ものい「物言」(名) ものを言ふと、言葉
ものい「物言」(名) ものを言ふと、言葉
ものい「物言」(名) ものを言ふと、言葉
ものい「物言」(名) ものを言ふと、言葉
ものい「物言」(名) ものを言ふと、言葉
ものい「物言」(名) ものを言ふと、言葉
ものい「物言」(名) ものを言ふと、言葉
ものい「物言」(名) ものを言ふと、言葉
ものい「物言」(名) ものを言ふと、言葉

ものがーものけ

ものが「物陰」(名) 物事をかくすと。
ものが「物陰」(名) 物事をかくすと。
ものが「物陰」(名) 物事をかくすと。
ものが「物陰」(名) 物事をかくすと。
ものが「物陰」(名) 物事をかくすと。
ものが「物陰」(名) 物事をかくすと。
ものが「物陰」(名) 物事をかくすと。
ものが「物陰」(名) 物事をかくすと。
ものが「物陰」(名) 物事をかくすと。
ものが「物陰」(名) 物事をかくすと。

ものこーものた

ものこ「物心」(名) 世の中の情態のわかる
ものこ「物心」(名) 世の中の情態のわかる
ものこ「物心」(名) 世の中の情態のわかる
ものこ「物心」(名) 世の中の情態のわかる
ものこ「物心」(名) 世の中の情態のわかる
ものこ「物心」(名) 世の中の情態のわかる
ものこ「物心」(名) 世の中の情態のわかる
ものこ「物心」(名) 世の中の情態のわかる
ものこ「物心」(名) 世の中の情態のわかる
ものこ「物心」(名) 世の中の情態のわかる

もろは—もん

もろはだ「諸肌」(名) 脇より腹にかけて雙方の肌。—ぬき「諸肌脱」(名) もろはだをぬぐと。—をぬぐ 襟を開きのけて、もろはだをあ

もんち—もんざ

(もん)ちつ「問懸」(名) もだえふまじと。もんねり「紋織」(名) 紋を淨織にしてあらはし出だしたる布帛。

もんぶ—もんせ

(もん)ぶ「門子」(名) 身分高き人の侍。もんぶ「門齒」(名) 齒の前面の真中に左右各二枚つゝならび生(ま)るもの、新、口唇の門戸にあ

もんせ—もんど

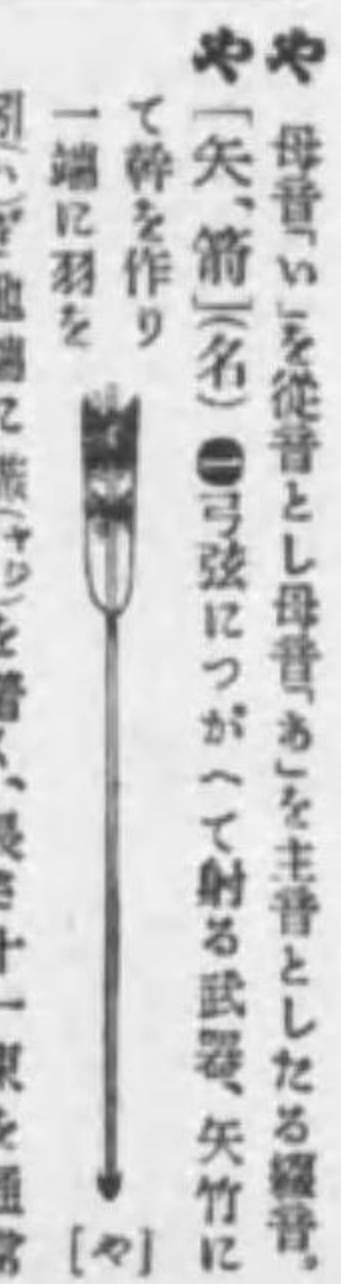
(もん)せん「門扇」(名) 門のとびら。もんせん「門前」(名) 門のまへ。—ばらひもん「門前拂」(名) 徳川時代の刑、追放の軽きものにして、平民は奉行所の門前より追ひ拂はれて歸るとを許されず、大小名は歸を授けて其屋敷の門より追ひ拂はれたり。

もんど—もんぶ

の被官にして、御井水・普水及氷室の事を掌りしもの、もひとりのつかさ。もんどめ「門留」(名) 門を閉ぢて通行せさせぬと。出入を差止むると。

もんぼ—や

一にして教育行政の單獨官府、教育・學藝に関する事務を管理するもの。(もん)ぼ「門摸」(名) てまじりすると。(もん)ぼ「紋本」(名) 紋の標本をあつめたる冊子。(紋帖)。



やきやーやく

土煙とするもの、蒸餾の原料を水飛(スイ)する際の上液を取り、これに硫黄(リウウ)の果皮の灰を加へたるもの、給具を加へて種々の色となすを得、ちやわんじり(糖)。一、素(焼物師)(名)陶磁器をやくとを業とする人。「鬼」。

やくーやくさ

(やく)「夜具」(名) 夜臥す時に用ふる布圍腰巻の類の總稱。
(やく)「えき」(薬液) (名) くすりのある。
(やく)「たせし」(厄落) (名) 厄難をのがる、と。

やくさーやくす

(やく)「さい」(藥劑) (名) 藥の品類、くすり。一、くわん(藥劑官) (名) 陸海軍にて藥劑の事務にあたる高等官。一、素(藥劑師) (名) 醫師の處方により藥劑の調合をなすもの、規定の試験に及第して免許を有する者にあらざればなるを得ず。

やくすーやくた

切ら、とき乙の甲に對する辭、「公」。
(やく)「すき」(屋久杉) (名) 大隅屋久島に産する杉、節多く木理美(ウツ)し、うづらちもく。
(やく)「せき」(藥石) (名) くすりといはばりと、轉じて、療治。

やくたーやくひ

(やく)「たく」(役宅) (名) 官より其役目のもの、住居に建て設けたる宅、官舎。
(やく)「たく」(約諾) (名) ちかひうけがよと。
(やく)「ちやく」(約定) (名) ちかひ、とりきめ。

やくふーやくら

(やく)「ふそく」(役不足) (名) 自分の役前が心に満たざる。
(やく)「ふつ」(藥物) (名) くすりとなるもの。一、がく(藥物學) (名) 藥物に就きて研究する科學。
(やく)「ぶん」(譯文) (名) 翻譯の文。一、漢文を假名文(ワ)り文に書き直すと。

やおんーやすみ

やおん(野人) (名) 無教育のもの。みなかもの。
やす(箱) (名) 魚を刺し捕らるる具。鱧にてつくり...

やすむーやせい

やすむ(休) (自、三四) 事止む。やむ。
やすむ(休) (他、三四) 休む。
やすむ(休) (名) 休むこと。

やせれーやそ

やせれ(瘦) (自、下) 痩せたる。
やせれ(瘦) (他、下) 痩せしむ。
やせれ(瘦) (名) 痩せたる。

やそらーやたの

やそら(八十氏人) (名) 多くの氏の人の。
やそら(八十氏路) (名) 死者の行く路。
やそら(八十氏路) (名) 前條に同じ。



やたふーやつが

やたふ(矢種) (名) えびらにさしたる。
やたふ(矢種) (名) えびらにさしたる。
やたふ(矢種) (名) えびらにさしたる。

やつがーやつす

やつが(八頭) (名) 八頭の。
やつが(八頭) (名) 八頭の。
やつが(八頭) (名) 八頭の。

やはらぎ—やはら

やはらぎ「矢剱」(名) 矢をつくる工人(矢人)。(やはらぎ「夜泊」(名) よるのふながり。やはらぎ「二乗」(形) 二) やはらかなり。よわし、軟弱なり。

やはら—やぶ

やはら「どり」(名) 柔術の一種。慶安年中、門人陳元龍歸化して江戸にあり、浪人福野七郎右衛門、浪人元次郎左衛門三浦與次右衛門これに就きて、兵法を學び、更に發明せしところを加へたるもの。

やぶさ—やぶる

やぶさ「やぶる」(動) 葉は赤色なれど後に淡綠色に變ず、花は四瓣綠色にして夏の頃開き實を結ぶ、ひきごづる、びんぼづる、かきとほし(馬鈴薯)。(る)あをかづら(一名)からほり、唐突な事をいひ又は行ふに。

やぶる—やほ

やぶる「破敗」(自) 下(二) 破れ、敗れ、く、こはる、さく、(傷、敗、壞) (敗に負) く、まく、(亂る) (破) 成り立たず、(窮)。

やほあ—やまあ

やほあ「あひ」(八百會) (名) 多くのもの、あつまりあふ處(湖の)に。



やまい—やまか

やまい「山鹿」(名) 鹿の一種。山鹿(鹿)の一種。山鹿(鹿)の一種。山鹿(鹿)の一種。

よみろーよまは

よみろーよまは (宵居) (名) 宵にながく起きて居ると。
よふ (酔) (自) 五上の酔。
よふ (呼) (他) 他は四。聲を立て、さけぶ、よばい。
よふ (呼) (他) 他は四。聲を立て、さけぶ、よばい。
よふ (呼) (他) 他は四。聲を立て、さけぶ、よばい。

よまひーよみく

よまひーよみく (迷言) (名) 不平をいふと、かこつと、又、其言。
よみ (讀) (名) 讀む。
よみ (讀) (名) 讀む。
よみ (讀) (名) 讀む。

よみぐちーよみや

よみぐちーよみや (讀口) (名) 和歌の名人。
よみ (讀) (名) 讀む。
よみ (讀) (名) 讀む。
よみ (讀) (名) 讀む。

よみわーよも

よみわーよも (讀渡) (他) 三四。
よみ (讀) (名) 讀む。
よみ (讀) (名) 讀む。
よみ (讀) (名) 讀む。

よもぎーよもす

よもぎーよもす (艾) (名) 植物科に属する草、山野に自生す。
よも (讀) (名) 讀む。
よも (讀) (名) 讀む。
よも (讀) (名) 讀む。

よもつーよりあ

よもつーよりあ (黄泉國) (名) 死者の行く地下にありといふ國、よみ。
よも (讀) (名) 讀む。
よも (讀) (名) 讀む。
よも (讀) (名) 讀む。

らりき—らりき

らりきよ「鰯魚」(名) いさり、すなごり。
らりきん「期吟」(名) 壁はがらかに吟ずる。
らりきん「勞銀」(名) 労働の賃銀。
らりきん「勞苦」(名) はねをり、いたつき。
らりきん「浪華」(名) 浪のくだけて華の如く散るもの。
らりきん「老獺」(名) 久しく経験を積み、狡猾なる。
らりきん「郎君」(名) ①わかとの。②妻又は情婦より良人又は情夫を稱する語。
らりきん「勞氣」(名) やまひ、いたつき。
らりきん「期月」(名) はがらかなるつきかげ。
らりきん「狼牙棒」(名) そでがらみ。
らりきん「狼顧」(名) 狼の如く危懼して後をかへりみる。
らりきん「牢固」(名) ぶつかりしてあると。かた
らりきん「老後」(名) 年老いて後。
らりきん「老功」(名) 久しく経験を積み、熟練する。①久しく勤務なしたるいさ
らりきん「牢賦」(名) ひとや、をり。
らりきん「牢典」(名) 囚人を送る典。
らりきん「老壯」(名) としよりとわかもの。
らりきん「老莊學」(名) 支那の老子と莊子を祖述する學、虚無を以て宇宙の根源とし、無爲を以て道德の標準とするもの。虚無學。
らりきん「勞作」(名) ①はねをりわざ。②はねをりはたらくと。
らりきん「老師」(名) としよりたる師匠。
らりきん「牢死」(名) 入牢中に死去する。
らりきん「老死」(名) 年をいて死ぬる。

らりき—らりす

らりき「浪死」(名) 流浪して死ぬる。
らりき「浪士」(名) 一定の事(か)ふるまなき士、秩祿に離れたる士、浪人。
らりき「老實」(名) 事になれてまめやかな
らりき「牢舎」(名) ひとや、牢屋。
らりき「老者」(名) としより。
らりき「勞症」(名) 結核性の肺病、肺結核、勞咳、肺勞。
らりき「老将」(名) としよりたる大将、又、経験を積める大将。
らりき「狼籍」(名) 派門と同じく萬事に因なりといふ日。
らりき「老弱」(名) としよりとことども
らりき「老手」(名) 老練せる人又は手な
らりき「老樹」(名) あいさ、
らりき「老儒」(名) としよりたる學者、又、老練の學者。
らりき「老熟」(名) 年久しく経験を積み、其物事に熟練する。
らりき「老職」(名) 幕府にて大老・中老などの稱、又、大名にて家老・中老などの職。
らりき「老神」(名) 心をくさしむると、心
らりき「老身」(名) あいのみ。
らりき「老臣」(名) 老功の臣、又、老年の臣。
らりき「老人」(名) としよりたる人、あき
な。①「せい」老人星(名) 南極星。
らりき「勞」(自、さ) 骨折る、はたらく。
らりき「勞」(他、さ) 骨折らす、わづらはす「勞を—」①ねぢらみ。

らりす—らりた

らりす「老衰」(名) 老い衰へると。
らりす「老成」(名) ①もとまぶると。②經驗を積み成りとのふと。③「老成」(名) 老成の人。
らりす「牢晴」(名) よくはれたる天氣、朗
らりす「老生」(代) 老人の自稱。
らりす「老少不定」(名) 老いと少さも死期は豫知すべからざるをいふ。
らりす「狼藉」(名) ①狼の草を踏(ふ)きて散らるゝの非常に亂る、よりの道具などの亂る。②「狼藉」(名) 亂暴、亂暴の舉行するもの。
らりす「老先生」(名) としよりたる
らりす「老僧」(名) としよりたる僧。
らりす「老足」(名) 老人のあゆみ。
らりす「老體」(名) 年よりの身。
らりす「老大」(名) 年をとると、わかざかりをさげとふるふと。
らりす「老大人」(名) ①としよりたる男子の敬稱。②他人の老いたる父の敬稱。
らりす「老國」(名) 繁榮の時期は己に過去に歸して、目下は衰へたる大國。
らりす「老黨」(名) ちうどう(郎黨)に同
らりす「老破」(名) 囚人がひそかに牢をぬけ出づると、又、其ぬけ出たる囚人、ちうぬけ(脱獄、破獄)。
らりす「老雄」(名) としよりたる英雄。
らりす「老來」(副) としよりてこのかた。
らりす「浪浪」(名、副) さまよひありくさまにいふ語。
らりす「期期」(名、副) はがらかなるさまにいふ語、「音吐」。
らりす「勞勞」(形、二) 物事に巧者なり、うまし。「ばらなると。
らりす「牢落」(名) ①はるかなると。②ましく経験を積み、熟練せる官吏。③久しく経験を積み、熟練せる官吏。
らりす「勞力」(名) ①はたらくと、はねをり。②(經)財の生産を目的とする心力及體力の活動、見方によりてこれを精神的と肉體的とに、有形的と無形的とに、自由のと不自由の(奴隷の類)とに、獨立のと風備のとに、生産的と不生産的のとに分類し、又、發明及發見、採取、粗製品、生産、製造工業、運搬及商業、動勞に區別す。③「勞力」(名) 勞力に従事するもの。④「勞力的機械」(名) 勞力者の熟練に代はる機械、例へば織物機械、紡績機械等これなり。

らりち—らりは

らりち「老中」(名) 徳川時代に、執政第一の職の稱。
らりち「老女」(名) 武家の奥向の侍女の長。
らりち「老畫」(名) あいぼる、と、あいぼれたる人。
らりち「郎等」(名) 家の子、けらい、郎黨、力を行使してはたらくと。①「くみあひ」(労働組合)(名) 労働者が労働者社會の改善又は利益を圖ることを目的として組織せる組合。②「老」(労働者)(名) 労働して生活を立てゆくもの、骨折仕事を業とするもの。③「もんだい」(労働問題)(名) 労働者社會に關する問題、殊に労働者と資本家若しくは企業家との間に起る労働者の待遇に關する社會問題。
らりち「期讀」(名) 聲高くよみあげると、する拙き演説。
らりち「牢主」(名) 徳川時代に、牢内の取締をなす囚人の長。
らりち「老若」(名) ①としよりとわかきと。②老中と若年寄と。
らりち「浪人」(名) 浪士と同じ。①一定の動先(つと)なきもの。②流浪する人。
らりち「牢脱」(名) 牢より(脱獄)。
らりち「老農」(名) 老いたる年。
らりち「老農」(名) 農業上の知識に富み且つ實際に熟練なる農民。
らりち「老婆」(名) 老いたる女、老女。①「老」(老婆心)(名) 深切する心。②「老」(老いはい)(名) 老廢(名) としよりて役に立たざ

らりは—らりば

らりは「老輩」(名) としよりども。
らりは「狼狽」(名) あわてふためくと、うたへさわぐと。
らりは「老馬智」(名) 支那の古昔、齊の管仲が、山中にて道に迷ひたるとき、老馬を放ち、其後に従ひて道に出たりといふ故事。②轉じて、夫々物事に久しくたづさはりたるもの、のすぐれたる智。
らりは「牢拂」(名) 牢屋の罪人を残らずとせ放つと。
らりは「牢番」(名) 牢屋の番人。
らりは「浪費」(名) ①みだりにつかひつひやすと。②みだりに金銭をつひやすと。③「老」(浪費者)(名) みだりに資産を浪費するもの。
らりは「老病」(名) 老衰より來たれる病氣。
らりは「老父」(名) ①としよりたる父。②としより、老人。
らりは「老夫」(名) としよりたる男子、あき
らりは「老婦」(名) としよりたる女子、ばや
らりは「牢扶持」(名) 牢内の囚人にあたふる食物。
らりは「老佛」(名) 老莊の教と佛陀の教と。
らりは「老兵」(名) としよりたる兵士。
らりは「廓廟」(名) 天下の大政の出づる所、朝廷。
らりは「老舖」(名) 數代つゞきし商家、ふに
らりは「老團」(名) 「ちうのちう」老農に同じ。
らりは「老母」(名) 年寄りたる母。「こ、
らりは「老僕」(名) としよりのつかひをと

らりば—らりり

らりり「老木」(名) あいさ、
らりり「老謔」(名) あいぼる、と、あいはれたる人。
らりり「老爺」(名) としより、あやぢ。
らりり「牢屋」(名) 囚人をつなぎとむる所、ひとや、(獄屋)。
らりり「牢役人」(名) 獄屋をまもる
らりり「牢破」(名) 囚人がひそかに牢をぬけ出づると、又、其ぬけ出たる囚人、ちうぬけ(脱獄、破獄)。
らりり「期期」(名、副) はがらかなるさまにいふ語、「音吐」。
らりり「勞勞」(形、二) 物事に巧者なり、うまし。「ばらなると。
らりり「牢落」(名) ①はるかなると。②ましく経験を積み、熟練せる官吏。③久しく経験を積み、熟練せる官吏。
らりり「勞力」(名) ①はたらくと、はねをり。②(經)財の生産を目的とする心力及體力の活動、見方によりてこれを精神的と肉體的とに、有形的と無形的とに、自由のと不自由の(奴隷の類)とに、獨立のと風備のとに、生産的と不生産的のとに分類し、又、發明及發見、採取、粗製品、生産、製造工業、運搬及商業、動勞に區別す。③「勞力」(名) 勞力に従事するもの。④「勞力的機械」(名) 勞力者の熟練に代はる機械、例へば織物機械、紡績機械等これなり。

らんとーらんま

(らん)とく「亂國」(名) みだれて治まらざる國。
(らん)ぎ「亂座」(名) 座順をみだしてすむる。
(らん)さう「亂葉」(名) 體體の内部にありて卵
子を生ずる器。
(らん)ざり「亂噪」(名) みだれさわごと。
(らん)ざり「亂造」(名) みだりに製造すると、あ
ちましく製造すると。
(らん)ざり「亂聲」(名) 喧嘩、鼓などの合奏、
+らんざり「亂作」(名) みだりに多く作ると。
(らん)ざつ「亂雑」(名) いりまじると、みだれまじ
ると、混雜。
(らん)ざん「亂山」(名) 一樣ならざる多くの山。
(らん)ざん「亂子」(名) 卵巢内にありて精子と合一
して生殖作用を営むもの、母體より分離せる一個の
細胞にして、受精後發育して動物個體を發生す。
(らん)ぞ「亂視」(名) 物を明かに視るを得ざると、
(らん)ぞ「亂死」(名) 火に焼けて死ぬると。
(らん)ぞや「亂射」(名) めちやくちやに矢又は彈
丸を發射する。
(らん)ぞや「亂射」(名) 蘭花と野香との香。
(らん)ぞや「亂鳴」(名) (家語)に其源可以
濫觴とあるに出づるかなと、はじまり。
(らん)ぞや「亂賞」(名) みだりに賞を行ふ
+らんぞや「亂賞」(名) 皇后の宮殿。
(らん)ぞや「亂聲」(名) 「らんざう」に同じ。
(らん)ぞや「亂待」(名) 奈良の正倉院
御藏の黄熟香に、聖武天皇が東大寺の三字を入れて
附けられたる名。
(らん)ぞゆく「亂熟」(名) たゞれうむと。
(らん)ぞゆつ「亂出」(名) みだりに世に出だす
と、みだりに世に出づると。

らんまーらんち

(らん)まん「亂心」(名) 氣のくるよと。「才臣」
(らん)まん「亂臣」(名) 國をみだす臣、むはんをな
(らん)まん「亂人」(名) 亂をなす人。
(らん)まんの「亂心者」(名) 氣のくるよるもの
の、まじらひ。
(らん)まじ「亂」(自、さ) みだらなる、み
だる。「小人則すれば」。「度に酔ふと」
(らん)まじ「亂醉」(名) 酔うてまだらなきと、過
(らん)まじ「亂世」(名) 亂れたる世。
(らん)まじ「亂省」(名) 「らんまじ」に同じ。
(らん)まじ「亂生」(名) 受精せる卵子のそのま、
母體外に出て、發育するもの、即ち鳥、魚、蟲などの
類にいふ。
(らん)まじ「亂製」(名) 粗末なる製法、みだりに製
(らん)まじ「亂聲」(名) 「らんまじ」に同じ。行
幸のとせ、さきをばらふ聲。
(らん)まじ「亂蕪」(名) 「蕪」だんどくに同じ。
(らん)まじ「亂語」(名) 「オランダ語」Lancetaは、
ランセッタ(名) 「オランダ語」Lancetaは、
(らん)まじ「亂戦」(名) 雙方入りみだれてた、か
ふと。「するもの」
(らん)まじ「亂賊」(名) 國をみだすもの、むはん
(らん)まじ「亂訴」(名) みだりに訴ふると、すこしの
事を訴ふると。
(らん)まじ「亂打」(名) わやみやたらにうちた、く
(らん)まじ「亂情」(名) なまくると、おこたると。
(らん)まじ「亂刀」(名) つかに針のつきたる刀、
ランタフ「亂塔」(名) 梵語「塔」の轉、高僧の
義、卒塔婆、墓、(明)塔。一は「蘭塔場」(名)
はかば、墓地。
ランタン「Lanthann」(名) 暗灰色の稀有なる
(らん)まじ「亂痴氣」(名) 情事に關したる恍惚、

らんちーらんひ

一「さわき」(亂痴氣) (名) 情事に關したる
恍惚よりいひあひ又はつかみあひなどする。
(らん)ちゆり「亂處」(名) (動) オランダの島の
島、まるこの一名。
ランテルン「Lantern」(名) 「オランダ語」Lantern「ラン
(らん)ちやく「亂讀」(名) わやみに讀むと。
ランドセル「Landsel」(名) 「はいなう」背嚢に同じ。
(らん)ちやく「亂入」(名) 亂れ入ると、みだりに
おし入ると。
ランニヤ「蘭若」(名) 梵語、阿蘭若の略言、林の
邊、寺院、テラ。
(らん)ちやく「亂暴」(名) みだりにあら、しき
所行をなすと、あばれまはると、あばると、暴行。
(らん)ちやく「亂房」(名) 美人のねや。
(らん)ちやく「亂邦」(名) みだれたるくに。
(らん)ちやく「亂暴者」(名) 亂暴をなすも
の、あばれもの。
(らん)ちやく「亂伐」(名) みだりに伐ると、山林
(らん)ちやく「亂髮」(名) みだれがみ、亂髮。
(らん)ちやく「亂發」(名) みだりに出すと、わやみ
に發すると、(亂)發。
(らん)ちやく「亂反射」(名) 「理」光線か表面
の指かならざる物體に投ずるとき、其各部より種々
の方向に反射すると。
(らん)ちやく「亂塵」(名) たゞると。
(らん)ちやく「亂費」(名) みだりにつひやすと、(亂)費。
(らん)ちやく「亂引」(名) 「ポルトガル」語 Lambi-
pão 一種の蒸溜製、鍋の上に鍋を蓋とし、其上に更
に冷水を盛る装置のもの。「れがき」
(らん)ちやく「亂筆」(名) 書體の亂れたると、みだ
(らん)ちやく「亂筆」(名) 亂れたるかみ、(亂)筆。

らんぶーらんり

(らん)ぶ「亂舞」(名) 古昔、五節の舞の後など
に、殿上人等の今様の短歌を誦して舞ひしと。
(らん)ぶ「亂布」(名) ぼろ。
ランプ「Lamp」(名) 火をとぼす普通通
燃料として石油を用ふ、石油を入る、器に口金
を附し、これに心(燭)を挿入し、火を點して「ホヤ」と
稱する玻璃製の圓筒をさす。一「おん」洋燈
心(名) 洋燈に火を點する心、木綿線にてつくり
たるもの。一「だい」洋燈臺(名) 洋燈を
ささぬき臺。一「つり」洋燈釣(名) 洋燈を
つる自在釣。
(らん)ま「欄間」(名) 天井と鴨居との間にある格子
又は透欄ある板などにて飾りたる部分。
(らん)ま「欄」(名) みだれたるま。
(らん)ま「欄」(名) 卵をさす、む。一
(らん)ま「欄」(名) 花の咲き亂れたるさま
にいふ語。一「明かにあらはる、さまにいふ語」天
眞。一「みだれ散るさまにいふ語」性命。一
(らん)ま「欄」(名) 非常に亂れたると。
(らん)ま「欄」(名) あをさるま。
(らん)ま「欄」(名) 玉子入りのそばきり。
(らん)ま「欄」(名) すかし欄のある門、又、
垣の上の方にあけたる窓なりともいふ。
(らん)ま「欄」(名) 天子の御名の與。
(らん)ま「欄」(名) やまかご、よつてかご、かご。
(らん)ま「欄」(名) 穿りに用ふると、わけも
なく用ふると、(安用、略用)。
(らん)ま「欄」(名) みだれはなる、と。
(らん)ま「欄」(名) 「ちりようわう」(蘭陵王)
に同じ。

らんるーり

(らん)る「亂」(名) ぼろざれ、つれ。
り「流音R」即ち舌の位置を硬口蓋の前端上齒の背部に
近づけ有聲の氣息を通じて發する音と、母音「い」と
の發音。
(り)「理」(名) ① 變ぜざるのり、かち、天、一、定ま
れる意義、わけ、「此」により、② 買きたる賦、す
ぢ、③ わかち、區別、④ きめ、紋理、一「がひ
でも」無理に、おして、せひに。
(り)「利」(名) ① つがふよきと、便宜、② やくにたつ
と、功用、③ 地形のすぐれたると、要害、「地の」、
④ 物事のするどきと、銳利、「一刃」、⑤ さいはひ、幸
福、⑥ かち、勝利、⑦ とく、利益、⑧ まうけ、得分、
⑨ 利子、利息。
(り)「里」(名) ① 古昔、人家五十戸を一區としての
稱、② 古昔、段別三十六町歩の稱、③ 我國にて地
上の距離を計るに用ふる最大單位、三十六町にして
三、九二七三キロメートルに當る、古昔は、三百歩
即ち今の六町の定めなりき、④ さと、むら。
(り)「漚」(名) 「かいり」(海)に同じ。
(り)「釐」(名) 「略して厘と書く」① 尺度の名、分の十
分の一、② 秤目の名、一分の十分の一、③ 銀目の
名、一分の十分の一。
り「助動」(つ、ぬ、たり)と同じく句の切目
につきて、去かありとの意を表はす語、四段括用の
已然言にのみつく、「行けー」。

りーりりか

「り」(接尾) 物事のもと又はさまをあらはす語の
末につくる語、「どたー」「ばたー」「ばさー」
り「あげ」(利上) (名) ① 買物、物の流れの時期に至
り、利息を拂ひて更に期限を延ばすと、② 利率を
高くすると。
り「あひ」(理由) (名) 道理のなむき、わけあ
(り)「い」(理由) (名) すぢみち、わけあ。
(り)「流」(名) ① 他と異なるさまを立てたる技術上
の系統、② 影、「小笠原」、③ すべて他と異なる
さまの稱、「日本」、「西洋」、「自己」。
(り)「留」(名) 「天」遊星の軌道上にて遊星が一町
留まりて見ゆる位置の稱。
(り)「柳」(名) 「天」二十八宿の一。
り「龍」(名) 「りゅう」に同じ、一のなかより、は
とけうまれたまはばこそあらめ。
(り)「流」(接尾) 旗を敷ふにいふ語。
り「う」(数) 學の唐音、ろく、むつ、(學の語)、
り「あん」(名) 「柳暗花明」(名) 柳の影
はくらく花の色は明かなる義にして、置にこもる春
のながめにいふ語。
(り)「い」(留意) (名) こ、ろを或物事にと、むる
(り)「いん」(溜飲) (名) 飲食の胃中に停滯して酸
敗液の出づる病氣、胃加答兒の慢性なるもの。
(り)「えい」(柳營) (名) 漢の將軍周亞夫が、細柳
に營を構へし故事より出づる將軍の居所、幕府。
(り)「えち」(柳腰) (名) 柳の枝の如くまかや
かなる腰、美入。
(り)「ねん」(流音) (Liquidae) (名) 「文法」舌を
上顎に近づけ、其中間若しくは兩側より有聲の氣息
を通せしめて發する音、即ちR、L、これなり。
(り)「か」(流行) (名) ひろく行はると、は

りちがーりち

りちがーりち (名) かんばりの流行感... 胃(名)「インフリュエンザ」に同じ。...

りちくーりち

りちくーりち (名) 硫化水素(名)「化」硫黄と水素と化合したる気体無色にして悪臭を有し...

りちごーりち

りちごーりち (名) 林檎(名)「りんご」の古言。...

りちろーりち

りちろーりち (名) 柳絮(名) 柳の花の絮の如く飛び... 柳の葉に似たるもの。...

りちたーりち

りちたーりち (名) 龍膽(名)「種」りんどうに同じ。...

りちはーりち

りちはーりち (名) 經(名)「経」資本の區別の一、一回の使用にて直に其形を變じ若しくは其感を換へ...

りりりーりから

りりりーりから (名) 樂器の音などのたへてよく聞こゆると。
りりりーりから (名) 樂器の音などのたへてよく聞こゆると。
りりりーりから (名) 樂器の音などのたへてよく聞こゆると。

りかくーりさむ

りかくーりさむ (名) はなれ(た)ると、又はなちへたつと。
りかくーりさむ (名) はなれ(た)ると、又はなちへたつと。
りかくーりさむ (名) はなれ(た)ると、又はなちへたつと。

りさゆーりくき

りさゆーりくき (名) 天子御出遊の所として、宮城の外に設けたる宮殿。
りさゆーりくき (名) 天子御出遊の所として、宮城の外に設けたる宮殿。
りさゆーりくき (名) 天子御出遊の所として、宮城の外に設けたる宮殿。

短折疾・憂・賞・恩・弱の類

りくくわ (名) 「ろくくわ」に同じ。
りくくわ (名) 「ろくくわ」に同じ。
りくくわ (名) 「ろくくわ」に同じ。

官といひ兵馬を司る・司寇(二)に秋官といひ、刑辟を司る・司寇(一)に冬官といひ、百工を司るの類

りくくわ (名) 「ろくくわ」に同じ。
りくくわ (名) 「ろくくわ」に同じ。
りくくわ (名) 「ろくくわ」に同じ。

たい「陸戦隊」(名) 海軍陸戦隊に同じ。

りくくわ (名) 「ろくくわ」に同じ。
りくくわ (名) 「ろくくわ」に同じ。
りくくわ (名) 「ろくくわ」に同じ。

りくくわーりくけ

りくくわーりくせ

りくくわーりくて

りつあーりつた

「リツ」漢語の韻せし比丘法、比丘尼法、受戒法、戒律の四分律を所依とし、戒律を宗とするもの、我國にては天平五年唐の僧鑑真が東大寺に於て授戒の儀を行ひたるを始とす、其後一時おとろへたりしが、實範及後、等によりて大に盛揚せられたり。

りつせーりつり

「リツ」は「立派」(名) 稱すべく敬すべきさまなるを、もごまかにしてはなやかなると、いかめしくみごとなるを、美譽。

りつりーりひ

「リツ」りよ「律呂」(名) 音樂の調子。「リツ」れい「立禮」(名) 起立して行ふ禮。「リツ」れい「律令」(名) 〇のり、おきて、〇「法」臺灣總督が其管轄区内に發し得る特殊の命令、其管轄内にては、法律と同等の形式的効力を有するもの。

りひーりやち

「リ」ハ「離披」(名) はなれひらくと。「リ」ハ「離披」(名) はなれひらくと。「リ」ハ「離披」(名) はなれひらくと。

りやちーりやち

「リ」ハ「涼衣」(名) ナツしき衣服。「リ」ハ「涼衣」(名) ナツしき衣服。「リ」ハ「涼衣」(名) ナツしき衣服。

りやちーりやち

「リ」ハ「両替」(名) 甲種、乙種の貨幣とをとりかふると。「リ」ハ「両替」(名) 甲種、乙種の貨幣とをとりかふると。



【けがうやち】

リヤリヤ

うけて莊園を預かりたる役人の稱。
リヤリヤ(領氣)一名、ものけ、物性。
リヤリヤ(領解)一名、さりとる、會得。
リヤリヤ(領敬)一名、昔時、大小名の相互の訪問、面會、禮通などに同等なる敬禮を用ひしとす。

リヤリヤ

リヤリヤ(領事裁判)一名、(法)領事裁判權によりて行ふ裁判。
リヤリヤ(領事裁判權)一名、(法)特殊の條約により一國の在留民が其在留せる國の裁判權に服從せず、自國の法律によりて自國領事の裁判を受ける特權。

リヤリヤ

リヤリヤ(良人)一名、妻より夫を指していふ語。
リヤリヤ(良言)一名、(諒)他、(善)まことなりとす。
リヤリヤ(良言)一名、(諒)他、(善)まことなりとす。

リヤリヤ

いふ體に同じ、不良體の對。
リヤリヤ(兩刀遣)一名、(兩)刀をつかふ劍闘者。
リヤリヤ(兩刀論法)一名、(論)假言命題と選言命題とを使用した三段論法、大前提に二個の假言命題を立て、小前提にこれを選言的に承認し若しくは拒否して斷案を得るもの、其斷案が肯定的なるときは構成的と稱し否定的なるときは破壞的と稱す。

リヤリヤ

のありといふ蛇。
リヤリヤ(兩得)一名、一時に二種の利を得る。
リヤリヤ(兩得)一名、一時に二種の利を得る。

リヤリヤ

リヤリヤ(良兵)一名、よき兵士、すぐれたる兵士。
リヤリヤ(良便)一名、雙方の便利。
リヤリヤ(良便)一名、雙方の便利。

リヤリヤ

リヤリヤ

リヤリヤ

